

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32404

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19991

研究課題名（和文）英語動詞派生前置詞からみた共時性・通時性の接点：言語変化のダイナミズム

研究課題名（英文）The Dynamism of Language Change: The Synchronic and Diachronic Interface of English Deverbal Prepositions

研究代表者

林 智昭（Hayashi, Tomoaki）

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：70906693

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、文法化の連続的なプロセスを捉えるため、言語変化の誘因となる英語史上の背景を念頭に、現代英語における動詞派生前置詞の使用実態を観察・整理し、どのような傾向があるかを記述することを目的とした。先行研究に基づき、前置詞を識別する種々のテストによる検証を行うとともに、大規模コーパスから抽出した用例の振る舞いを記述し、文法化の観点から including, seeing を分析した。また、通時性を念頭に considering, touching への文法化を質的に記述し、認知文法（Langacker 2008）の「時間性」の観点から検討することによって言語変化を動機づける認知的基盤を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

動詞派生前置詞への文法化の連続的なプロセスは「動詞か、前置詞か」といった分類を厳密に行うことが難しく、同一コーパス内における品詞分類（タグづけ）も難しいという問題点がある。また、前置詞化した concerning の意味が、もとの動詞 concern の意味と異なったものとなっているように、通時的にみると起源と意味変化の過程が同一とは限らない（cf. 児馬 2001）。本研究は、このような言語変化の連続性を捉える上での視座を提供し、通時的な言語変化を共時性との接点から理論的に予測して分析するための方法論を提供するという点で意義を持つものである。

研究成果の概要（英文）：The aims of this present study are to capture the gradualness of grammaticalization and identify the historical context motivating language change, through analyses of deverbal prepositions in Present-Day English. The first study focused on two deverbal prepositions: including and seeing. As for including, through a qualitative study based on the Corpus of Contemporary American English (COCA) and one with syntactic tests from previous studies, we examined whether the preposition has characteristics observed in typical prepositions. As for seeing, based on the British National Corpus (BNC), we conducted a quantitative study in terms of genre. Second, we analyzed considering and touching from synchronic and qualitative points of view, in order to reveal the cognitive basis of grammaticalization. Employing Cognitive Grammar (Langacker 2008), it was argued that their grammaticalization path is characterized as a shift from “temporal” to “atemporal” construal.

研究分野：英語学

キーワード：文法化 漂白化 脱範疇化 動詞派生前置詞 汎時性 時間性 動詞性 前置詞性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

1990年以降、コーパスの発達に伴ってデータの質的・量的分析が可能となり、言語変化の中でも文法化の研究が盛んになされるようになった(秋元 2002、秋元編 2001、秋元・保坂編 2005)。その中でも、*during, considering, concerning, regarding*等の動詞に由来する前置詞(動詞派生前置詞)は、通言語的に興味深い変化を遂げてきた例として着目される(秋元 2002)。しかし、文法に関する言語変化(文法化)はゆっくりと漸次的に進む連続的なプロセスであり、急速に進む語彙・音韻の変化と比べ感知・分析が容易ではない(Leech et al. 2009: 7-8)。それゆえに、同一コーパス内における品詞分類(タグづけ)も一貫性がない(Olofsson 2011)。また、従来の研究では、文法化した形式の成立過程に主眼が置かれており、近代英語期における文体の発達との関係等、変化の誘因となる歴史的背景について、多くの研究課題が残されている(cf. 秋元 2002: 190)。

## 2. 研究の目的

動詞から前置詞への文法化は、動詞にみられる特徴(動詞性)の喪失と、それに伴う前置詞的機能(前置詞性)の獲得により特徴づけられる(林 2020)。本研究では、文法化の連続的なプロセスを捉えるため、言語変化の誘因となる英語史上の背景を念頭に、現代英語における動詞派生前置詞の使用実態を観察・整理し、どのような傾向があるかを記述することを目的とする。加えて、共時性と通時性の接点から、歴史を経て現代へと至る中の言語変化のダイナミズムを解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、通時性・共時性を統合した「パンクロニック」な視点(山梨 1995, 2000)が重要であるという考えに立脚している。言語の共時的側面に関わる事実が、通時的側面から独立している保証はない。例えば、現代英語における動詞派生前置詞の「書き言葉」的な傾向には、初期近代英語期において、書き言葉での必要性から発達した前置詞であるという背景がある(Görlach 1991)。

本研究の理論的側面には、(i) 文法化理論、(ii) 動詞派生前置詞の通時的発達、(iii) 現象全般にみられる特徴を記述した記述文法、(iv) 懸垂分詞の認知言語学的分析、(v) 前置詞の機能と文法化、に関する先行研究に関わる。分析においては、母語話者の内省に基づく定性的手法とコーパスを用いた定量的手法を一貫して用いる。まず、先行研究を援用し、種々の識別テストによる作例を行い、英語母語話者への調査を実施し、前置詞性・動詞性(林 2020)の観点から当該現象の共時的記述を行う。並行して、先行研究や記述文法における議論を出発点としつつ、言語理論の知見に基づいて共時性と通時性の接点を探っていく。

## 4. 研究成果

2年間の研究成果は以下の通りである。まず、事例研究として *including* と *seeing* の記述研究を行った。また、通時性を念頭に、動詞派生前置詞 *considering, touching* への文法化を質的に記述し、認知文法(Langacker 2008)の「時間性」の観点から検討することを通して言語変化を動機づける認知的基盤を考察した。

第一に、動詞派生前置詞 *including* の事例研究を行い、Corpus of Contemporary American English (COCA) より抽出したデータについて、先行研究における前置詞を規定する種々のテストに基づき定性的な分析を行った。具体的には、(i) 等位接続テスト、(ii) 典型的前置詞への置換、(iii) 前置詞随伴、(iv) 強意副詞 *right* との共起、による検証を実施した。これらでの結果を踏まえて、*including* は文脈により頻度の高い前置詞 *among* への置換が可能であること、動詞 *include* の原義が強く保たれている例であること、等を論じた。

第二に、通時的に存在し続けているものの、コーパスの頻度に顕著な推移が見られない static なタイプの文法化とされる、文法化した *seeing* の研究を行った(Mair 2004)。British National Corpus (BNC) から、振る舞いを基準に前置詞・接続詞として用いられている *seeing* の用例を抽出し、コーパスにタグづけられた生起ジャンル情報に基づいて考察を行った。結論として、前置詞の *seeing* は書き言葉である一方、接続詞の *seeing* は話し言葉で用いられる傾向があることを指摘した。この結果は、文法化した *considering* の用法と平行的であり、動詞派生前置詞・接続詞の用法に一定の傾向が見られることを示唆するものである。

最後に、COCA から抽出したデータとアメリカ英語を母語とする話者の内省に基づき、動詞派生前置詞 *considering, touching* の振る舞いを記述した。その上で、文法化における動詞性の喪失(動作主性、副詞共起、意味の漂白化)と前置詞性の獲得(前置詞への置換テスト、談話機能)について検討し、カテゴリー変化の連続性と揺らぎに関する考察を行った。また、認知文法の観

点から、文法化が「非時間性」(Langacker 2008) に向かうプロセスであると位置づけられることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林智昭	4. 巻 23
2. 論文標題 言語変化の認知的基盤－動詞から前置詞への文法化に注目して－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 252-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayashi, Tomoaki	4. 巻 34
2. 論文標題 A Descriptive Study of Seeing as a Static Type of Grammaticalization: From a Synchronic Perspective	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明海大学外国語学部論集	6. 最初と最後の頁 81-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林智昭
2. 発表標題 言語変化の認知的基盤－動詞から前置詞への文法化に注目して－
3. 学会等名 日本認知言語学会第23回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 林智昭
2. 発表標題 includingの語法に関して
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第16回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------